井上靖

地図にない島

文春文庫

文春文庫　104—18

地図にない島　定価 500円

1980年6月25日　第1刷

著者　井上　靖
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

地図にない島

井上靖

文藝春秋

内容目次

白いヴェール 7
鳥渡る 36
雲 55
赤と黒 74
ビルの旗 96
芦の地帯 117
夜 142
訪問者 162
報告 186
唇 208
白い椿 229
石と砂 250
花束 284

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

美貌 302
雪の日 331
紀州の海 354
南の光線 371
風の強い島 387
白い封筒 405
春の個展 423
塔 444
屋上 461
晴着 486
新しき出発 500
解説 福田宏年 515

地図にない島

白いヴェール

メイン・テーブルの中央で、花嫁の多加子は、アイスクリームのスプーンを静かに口に運んでいた。それまでに運ばれて来た料理には殆ど手をつけなかったが、アイスクリームだけはおいしかった。

結婚の披露宴で花嫁というものは料理が喉を通らないものと言われていたが、多加子の場合は同じように料理には手を出さなかったが、事情は少し違っていた。

衣裳は洋服だったので、躰が窮屈だというようなことはなかった。それから一生で一度だけの華やかな見世物になっているはじらいといったものはなかった。はじらいのために顔も上げられず、手も動かせないというようなことを、婦人雑誌で読んでいたが、そんなことはなかった。

会場には百三十人程の来賓が十幾つかのテーブルに配され、それぞれのテーブルから絶えず幾つかの眼が自分の方に注がれていたが、多加子はそれに対して少しも気おくれしていなかった。

何人かの人が立って祝辞を述べている時も、また仲人の長い挨拶の間も多加子は白いヴェールをかむったまま、顔を真直ぐに上げて、会場の正面の大理石の円柱に眼を当てていた。

人々の眼には、そんな多加子は虔(つつま)しい気品のある美しい花嫁に見えたが、多加子は実は来賓の祝辞も、仲人の挨拶も殆ど聞いていなかった。

多加子は隣席の花婿の大家洪介のフォークとナイフを掴んでいる太い頑丈な手首に、時々ちら

っと眼を当てては、これが自分の夫となる男性の手であろうかと思ったり、その手の動かし方に何か乱暴なものを感じて、ひどく不安になったりしていた。

大家洪介の話し声も気になった。彼は大学時代の恩師だという老教授と話したり、笑ったりしていたが、多加子は、自分はこれから長い一生、毎日のようにこの声を耳にしなければならないのであろうかと思った。

勿論、多加子は人身御供に上がったのでもなければ、強制的に嫁がされて行くわけでもなかった。見合結婚ではあったが、半年の交際期間があり、大家洪介とはその間一緒に何回か食事もしており、一応相手の気心は判っている筈であった。

それでいて、不安は彼女がこの披露宴の会場に入り、自分の席についた時から始まっていた。いま自分の横に坐っている青年が果して自分の生涯の伴侶になるべき人物であろうか。自分は、いま、何か大きい間違いをしでかそうとしているのではないか。ずっとそういう不安におそわれた。

多加子は、だから、料理どころではなかったし、また祝辞どころではなかった。

会場からいっせいに拍手が沸き起った。その時、多加子はそれが何のための拍手であるか、いっこうに判らなかった。多加子は隣りの大家洪介が立ち上がり、静かに自分の腕を取ろうとするのを感じた。多加子も立ち上がった。多加子は初めて、自分たち二人は、新婚旅行に出るために、いま、この会場を立ち去ろうとしているのだということを知った。

多加子は洪介に片手を預けたまま、テーブルとテーブルとの間をぬって会場の中央を出口の方へ歩いて行った。どのテーブルからも多勢の人の祝福の眼眸が二人に注がれた。拍手は二人が会場から出てしまうまで続いた。

「これで、どうにか終った。疲れたでしょう」
洪介は控え室の方へ歩きながら、ささやくように多加子に言った。
「いいえ」
多加子は答えた。
控え室は、洪介の方と、多加子の方と別々になっていた。多加子が自分の控え室へはいると、叔母が、
「さあ、大急ぎ、大急ぎ、汽車の時間がないわよ」
と言った。そこへ会場から出て来たらしい母と、学校時代の友達二人が駈け込んで来た。駅まで送るつもりらしかった。
モーニングを背広に着替えた洪介がやって来ると、一同は控え室を出、エレベーターで一階へ降り、大型の自動車二台で東京駅へ向かった。
時計を見ると、七時三十分である。霧でも薄く流れているのか、街の灯はうるんで見えた。
多加子は、ああ秋だと思った。結婚式を終え、これから新婚旅行へ出かける花嫁としては、多少型破りの感慨であった。しかし、確かに秋であった。結婚騒ぎのため、夏の去ったのを知らず、気がついたら、いつか秋になっている恰好だった。
ホームには列車がはいっていた。多加子は列車に乗り込む時、また不安な気持に襲われた。だんだん取り返しのつかない立場に追い込まれて行く、そんな気持だった。
多加子は車窓から顔を出して、ホームの友達と話した。
「確(しっか)りね」
友達の一人はそんなことを言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「大丈夫よ」

多加子はそんな答え方をしたが妙に自信のない気持だった。

母は友達の背の方に、黙って立っていた。

少し悲しそうだった。自分の娘を嫁がせる母親の顔は、このようなものであろうかと、多加子は母の顔に眼を当てていた。

列車が動き出すと、多加子は自分たちに注がれている周囲の人たちの眼を眩しく感じながら、窓外へ視線を投げていた。

車内は大体乗客でいっぱいになっていたが、多加子と洪介だけ四人掛けの席を二人で占領していた。

列車が品川を過ぎた時、多加子は初めて視線を対い合って腰掛けている洪介の方へ向けた。洪介はノートを出して、それに細い鉛筆で何かを書き込んでいた。いかにもその仕事に没頭しているといったそんな感じであった。

身長は五尺六、七寸ぐらいで、男性としてはまあ大きい方である。学生時代ラグビーの選手をしていたというだけあって、肩幅も広く、総体にがっちりした感じである。

顔も整っている方である。好男子ではないが、多加子に彼との結婚をすすめた大勢の人の意見では、男性的で、人好きのする顔だそうである。多加子自身は人からそう言われれば、そうかと思う程度で、特別男性的とも、人好きのする顔とも思えない。強いて自分の感想を述べれば、何となくぬうっとした取りとめのない感じで、何を考えているか判らぬところは、むしろ無気味である。

尤も、この無気味だという感じは、今日披露宴の席に就いてから、初めて多加子の心に取りついたものである。半年間の交際期間中は、さして婚約者を無気味には感じていなかった。

洪介は相変らず手帳と睨めっこしていた。多加子の眼には、洪介の頑丈な太い指先と、その指先が握っている細い鉛筆とがひどく不釣合に見えた。

と、洪介は手帳を閉じ、その背に鉛筆を插し込むと、右手にその手帳を持ったまま、いきなり両手を左右に伸ばした。

次の瞬間、洪介は躰を少し反らせるようにして欠伸をした。

そして、欠伸をしながら、多加子にそんな自分を見られたことに気付くと、すぐ手帳ごと右手を口のところへ持って行って、口を二つ三つたたき、

「疲れたでしょう」

と言った。

「いいえ」

多加子は少しつんとして答えた。新婚旅行の列車に乗って三十分も経たないうちに、大きな欠伸をするとは失礼だと思った。いまは生涯で一番厳粛な時の筈である。それなのに、この人は欠伸をしている。

横浜で数人の乗客が乗り込んで来たので、洪介は多加子の隣りに席を移した。そして列車が動き出すと、多加子に話しかけて来た。

「おなかすきませんか」

「いいえ」

「僕はとても式の料理だけでは足りませんよ」

二人だけになった最初の会話は空腹の訴えであった。
「平生、たくさん召し上がります？」
多加子は訊いた。
「食べる方でしょうな。酒でもはいると凄いことになります」
洪介は煙草に火を点けながら言った。
「お酒召し上がります？」
「飲む方でしょうな」
「でも、いつか、お酒はあまり飲まないとおっしゃいましたわ」
「そんなこと言いましたか――言わんでしょう」
「銀座を歩きながら、おっしゃいましたわ。わたしがお訊きしたら、アルコール類はあまりたしなまないって」
「ほう。呆れましたね」
いかにも呆れたといった顔をして、
「そう言えば、そんなことを言ったような気もしますね。心にもないことを言ったものですな」
それから、いかにも愉快そうに声を出して笑った。多加子は笑わなかった。まだ式を挙げた許りなのに、もうこんな図々しい態度を示す相手が、多加子には決して快くは感じられなかった。
それから二人は黙った。一、二度、洪介は声をかけてきたが、多加子は眼をつぶって、眠ったふりをしていた。
多加子は宴会場で感じた不安な思いが、列車に乗ってから徐々に形を取って現われてくるような気持であった。

自分が小さい時から胸に描いて来た、自分の夫となる男性は、このような人物であったであろうか。花嫁に大きな欠伸を見せ、自分の言った言葉を平気で笑って訂正してしまうような人物が、自分の夫でいいのか。

多加子は眼を開いた。列車は小田原に着いていた。見ると洪介は眠っていた。この方はそら眠りでなくて、本当に眠っていた。腕を組み、顔を少し仰向けに反らせて、軽い寝息を立てていた。

多加子はそんな洪介に怒りを感じた。そして自分も眠ろうと思って眼を閉じた。

列車が沼津へ着いたのは、十時半であった。二人がホームへ降りると、静浦のホテルから出迎えの男が来ていた。

駅前からすぐ自動車に乗せられた。

「元気がないですな」

「頭が少し痛みますの」

多加子は言った。実際に頭痛がしていた。躰全体が熱っぽく、顳顬(こめかみ)がずきずきと脈を打っている。

宿は海岸の松林の中に建っていた。

洪介がフロントで名前を書いている間、多加子はロビーの窓際に立っていた。

多加子は口がきけないほど疲れていた。

二人は二階の角部屋へボーイに案内された。

「なかなかいい部屋でしょう。先月、新婚旅行のホテルの下調べにやって来ましてね。この部屋を見ておいて、予約したんです」

洪介は言ったが、ボーイがまだ部屋の中にいるので、多加子は気恥ずかしい気持だった。洪介

が言うように、なるほど部屋はかなりの広さを持ち、調度も落ち着いた感じのものが配されていた。寝台が二つ、部屋の隅に一間程の間隔をおいて置かれてある。

多加子は窓を開けた。前は松林になっていて、その向こうはすぐ海になっているのか、夜気の中には潮の匂いがふくまれている。

依然として頭は痛かった。

「すぐ風呂にはいりますか」

洪介が近寄って来て声をかけた。

「風邪をひいたのでしょうか、頭が痛みますの」

多加子は悲しげな表情で言った。

「そりゃ、いかん。どれ、こっちを向いてごらんなさい」

洪介は言うと、いきなりてのひらを多加子の額のところへ持って行った。

「なるほど、少し熱い。医者を呼びますか」

「お医者なんて」

多加子は、洪介の言い方の大袈裟なのに驚いて言った。

「悪くなったら大変です」

「そんなにひどくはならないと思いますわ」

「いや、用心した方がいい。肺炎にでもなったら、取り返しがつかない」

「大丈夫です」

「そうでしょうか。じゃあ、風呂はやめて、すぐお寝(やす)みなさい」

洪介の言葉で、多加子はほっとした。早く寝台に横たわって、一人になりたかった。

洗面所で手や顔を洗うと、
「どこか別のお部屋ないでしょうか」
と、多加子は言った。
「別の部屋って」
「着替えしたいんです」
「なるほど」
洪介はちょっと考えていたが、
「僕は暫くそとを歩いて来ましょう。その間にお寝みなさい」
そう言うと、
「じゃあ」
変な言葉を残して、洪介は部屋を出て行った。
多加子は母が鞄の中に詰めてくれた新しい寝衣(ねまき)を取り出すと、それに着替えた。寝台に横たわる前に、もう一度窓を開けると、松林の中を歩いている人影が見えた。煙草の火が赤く見えている。洪介らしかった。
部屋の電灯を消して、寝台にはいった多加子の耳に、急にいままで気付かなかった波の音が高く聞えて来た。
多加子は眼をつむったまま、波の音を聞いていた。波が砕けたあと、きまって谷の底へ落ち込んで行くような静けさが続いた。そしてその静けさの中で、右の顳顬のうずくのが感じられた。
多加子には考えることはいっぱいあった。一体、これから自分はどうしたらいいのか。結婚式は挙げたとはいえ、いまならまだどうにでもなると思う。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com